

みたい。

三浦大太郎

＜言語＞派社会学¹⁾とは、いかなるものか？（すでにのべた理由によつて、その「通説」があるわけではないのは、もちろんのことだが）後分図式的にのべようとするならば、たとえば、それは「社会体系の理論の典型を実在体としての言語の存立機制に求める」（巨【1977:62】）プログラムに従うものである、ということができるかもしれない。（かく、こういえば、当然、「実在体」とは何か、「実在体としての言語」とは何か、「実在体としての言語の存立機制」とは何か、といった疑問が、ふたたび提出されるであろう。これらにつぎつぎにたえることは、結局、定義の全体を提示することに等しくなるから、schematicな対応の範囲内を結着がつくことではない。現在の段階で、＜言語＞派社会学が、これに完全に応えきる、と期待することはできないだろう。そこで、議論を、実質化していく必要がある——＜言語＞派社会学のプログラムは、どのようなプログラムか？ それは、いかなる特徴をもった社会理論であるのか？

注1)「＜言語＞派社会学」と表記して、「言語派社会学」と表記しない理由が、さてあるわけではないが、（いって言うならば、ここでいう＜言語＞とは、ふつうに言語学で扱われる‘langue’や‘langage’のことではなくて、より広く、人間が「言語」を駆使する存在としてあることによつて、そのような狭義の「言語」以外のさまざまな語領域に惹起されることになる固有の語事象（いわば、広義の「言語」）をも、包括的にさすようにしよう、という、表記上の工夫である、と考えてもよい。

さて、ふたたびすでにのべた理由によつて、具体的な形で提示された＜言語＞派社会学のプログラムがちょうどどうもい具合に存在しているわけではないので、やむをえず、私の“記号空間論”の構想を敷衍して、その当座の代用とすることになしよう。以下では、＜言語＞派社会学の名のもとに、“記号空間論”が念頭におかれることになるが、それは、この小論に限ったことである。

* ここで、ありうべきひとつの誤解を、予防しておくべきだろうか——人

は思つかもしない、よしい、＜言語＞派社会学”は、言語と、社会現象の鍵事象として理解している、ゆえに、社会分析（社会理論）の範疇を、言語分析の方法（言語理論）のなかに、求めるにちがいない。ところで、今日、言語理論の最も豊饒な姿が、変形生成文法理論において見出されるというのは、衆目の一致するところである。そこで、要するに、＜言語＞派社会学”は、変形生成文法の語方法（語技法）を、出来る限り社会分析のなかに移入したりしようと試みるにちがいない。ところが、そのような無謀な試みがうまくいくという保証などにもないから、そのような立場は、大いなる困難にまみれることになるであろう——。このような見解が誤解である、というるのは、それは、＜言語＞派社会学の理論を、言語理論と、直接に結びつけて考えてしまっているから、である（勿論、利用可能であれば、変形文法であればよい。特定の言語理論を借用して悪用するわけではないが）。＜言語＞派社会学が、その名称に「＜言語＞」を冠する理由は、人間が言葉を喋る存在であるという重要な本質的な事実を注目し、そこから社会理論を構成することが、最も重要である、と考えていることだけに、ある。

“記号空間論”の企図

“記号空間論”のいちばんあたらしい構想は、橋爪【1977c】に、比較的まとまった形で示してあるので、詳細は、そちらに譲るほうがよいだろう。ここでは、行論の必要上、“記号空間論”の企図するところについて、のべておくべきかもしれない、と思われるので、その点を、少しく論じておく。

“記号空間論”は、そもそも産業社会²⁾を批判する理論として、構想された。“記号空間論”は、産業社会の諸形態の解体と死滅の必然性を論証し、併せて、それに替るありうべき社会の形態を予描することとを、その終極的な目標としている。（だが、2、“記号空間論”のなかにあらわれる諸概念は、おおむね、資本制社会システムを構成する現実的な諸契機を批判的に解析することができるよう

に、その照準を定められている。

注2) ここで産業社会とは、産業革命ないし科学革命以後に展開した、資本主義、帝国主義、社会主義諸社会の系列を包括する、ある形態の社会システム——総じて、資本制社会と、称することになる。

さて、“記号空間論”による批判は、社会をひとつの記号的な空間として捉えようとする基本的な視角に、支えられている。というのは、この視角が提供する枠組みのなかではじめて、資本制その自体を、人間の本源的な行為——これは、たとえば、記号実践と規定すべきかもしれない——の秩序の、単なる資本制的な諸変形として、体系的に捉えられた諸実現形態にあてはまるものとして、捉えることが、原理的に可能となるからだ。資本制空間は、人間の張りうる恣意的な記号空間のなかの、一部分空間として、記述されなければならない。このように、資本制批判は、資本制の歴史的な必然性を、記号学的な恣意性のなかに行った人解きほぐしていく作業として、遂行される。

“記号空間論”は、社会に関する1個の理論なのであるから、教条やドグマを振りかざそうとするわけではなくて、ただ、仮説を提示しようとするにあてはまらない。仮説は、それとともに、仮説自らを検証するための基準をも提出するといふ、方法的な懐疑の表明であるから、狂信とは厳密に区別される。といへば、“記号空間論”は、資本制を批判すると融れまわった上の企図を、空手形のまゝに終らせないためには、現存する社会事象に対して十分に妥当な仮説群を用意するのになければならぬ。さもなければ、“記号空間論”は、理論として失敗し、〈言語〉派社会学の列に加わる資格を喪うことになるだろうから。かくして、“記号空間論”は、その原理論に相当する部分においては、人間活動の任意の諸領域のなかで、固有の記号的な秩序を見出そうと、つとめるのである。

“記号空間論”が提案しようとしている仮説の多くは、その妥当性がたしかめられたならば、〈言語〉派社会学の正当性を根拠づける有力な証左を与えることになるであろう。ただ、残念ながら、現

在のところで、“記号空間論”の作業は、まだそこまでするべきでない。そこで、以下では、“記号空間論”の仮説のうち、行為の統合構造仮説にもつぱら焦点を絞って、議論してみることにしよう。

“記号空間論”は、人間の行為に、固有の記号的秩序が存在すること、のみならず、これは行為の統合構造としてとりだすことができること、を仮説している。もし、この主張が正しいければ、それだけでも、〈言語〉派社会学は、〈言語〉を鍵として人間—社会事象を解明しようとするその方法が誤りでない、という、基礎づけをえたことになる。というのは、行為が社会事象全般に対して最も基礎的な位置を占めることは、いうまでもないが、この行為が、統合構造をもつならば、〈言語〉に属することは明らかだ、と言ってもよいだろうから。

以下では、行為に統合構造が存在するのではないかと考えられる、いくつかの論拠を示すことを試み、さらに、それがどのような統合の構造であるのか、という内容についても、引いてみるつもりである。“記号空間論”のこの試みは、とりもなおさず、〈言語〉派社会学を方法的に基礎づける作業に、直結している。

行為には、固有の記号的秩序がある

人間の行為をどのように把握し記述すればよいか、について、現在、両極的なふたつの傾向が存在している、と言ってよいだろう。ひとつは、伝統的な人文主義から、現象学、漠然とした一般的な常識にまで流れている傾向であって、人間をそれ以外の動物から峻別し、人間の行為を、人間だけに固有の内的な要因から理解すべきである、とみなす直観を、共有している。このような見方は、もっとも「自然」であるから、かならずしも明確な見解に結晶していきとは、限らない。これに対する、もうひとつの傾向は、典型的には行動主義ないし現代心理学に、体现されているのだが、この立場は、行為（というより、行動）を、散漫に操作的な諸概念（のみ）によ

って記述、解析しようとする。この方法に徹底すれば、結局のところは、人間の行為を、(動物的な)行動と連続的なものと考え、有機体の行動研究においてだけ人間の行為を考えようとする、という態度に至りつくしか、ないだろう。

* 歴史的に言えば、後者、すなわち行動主義的な行為観は、前者に対する方法論的な反省と批判の上に生みだされた。そして、行動主義は、「科学」であるために必要だと自ら掲げる条件に合致するような仕方で、行為(有機体の反応)を、操作的に制御した状況と関連づける関係として表わしようとする努力をつづけている。このような傾向の延長線上にある現代心理学は、人間行為を解きあかすには、はるかに遠い現状にある。おそらく、操作主義にもとづく人間研究は「方法によって対象を切りぎむ」という過誤と転倒を犯しているのだ。人間行為について知ろうとするには、厳密な方法で武装してはいるが本質的なことは何ひとつ言えない心理学の帰結を満足するか、あるいは、常識や通念の範囲をこえてい無方法なさまざまな言説を満足するか、いずれかをえらぶしかないものであるか？

根本的な問題は、人間の行為が、その本性上、操作的に把握し記述しうるものなのかどうか、ということにある。たとえば、言語等においては、Chomskyをはじめとする変形生成文法派は、言語事象を行動主義の立場から扱おうとする接近法^{アプローチ}に対して、徹底的な批判を対置し、その立場を葬り去った(→ Chomsky [1959])。Chomskyの批判の要諦は、言語行為は文の無限の生成を可能にするような言語能力にもとづくものと考えられるから、それを、状況依存的(有限的)なものとして説明することはできない、と指摘している点にある、と考えてもいいと思われるが、社会事象を扱う社会理論の場合にも、事態はほぼこれと並行的である、と言えるだろう。

* ここで形式的に思考して、つぎのようなこともいえる——Chomskyの行動主義批判が妥当であるとせよ。すると、言語行為は、行動主義の枠組みでは、捉えきれない事象である、といえる。しかし、言語行為は、明らかに、人間の行為一般の中に含まれるだろう。すなわち、行為一般を、行動主義の枠組みで捉えるという仕方が正当でないことも、また、

すでにChomskyによる批判の妥当性から、明らかである、と言わなければならない。この推論は、正当であるが、行為分析を行動主義的に分析する仕方を批判しようとする場合には、より「まし」な仮説を立てることができるかどうか。実際上の岐点目に存する。このような積極的な仮説として、とりあえず試作された概念が、これから論ずる「行為の統合構造」である。

仮説は、事象の本質的な部分を、命題ないしモデルの形に、うつしかえたものでなければならぬ。仮説の構成の仕方が操作主義的であるか否かが、科学であるか否かの基準になる、という見方は、科学に関する操作主義の「テオロギー」である。方法的に充分根拠をもていけば、どのような仮説も、承認されるべきだろう。

* 行為に統合構造の存在を仮説する、とは、方法論上、どのような意味があるだろうか？　ごく簡単に言って、この仮説は、行為には固有の秩序——記号的秩序——があること(すなわち、行為は、記号的な秩序として、実在していること)、行為は、形式的にとり扱われる必要があること、行為は、ある種の抽象性をそなえていること、そのため、行為は、直接観察可能な外形には置えられない抽象的な構造によってしか理解できないこと、……を主張するものである。この仮説は、行為の動因として、直接に内面的な「価値」、「欲求」、「効用」、……等を想定するおな仕方にくらべて、「より強い」主張を含んでいる。「欲求」なり、「目的」なりといった、行動を動機づける抽象的な内面性は、まわくは、行為の統合構造の側から、それを記述するための概念として、要請される位置づけられたいことになるだろう。このように、行為の統合構造仮説は、一方では、行為を妥当に記述するかどうかという、外的規準をもつことにより、実証的な理論装置であることを、より直接に自証明していくとともに、もう一方では、個体の内面性なり心的領域なりについて、根拠のある命題を提示するものである、といえる。このことにより、行為の統合構造仮説は、行動主義と直観との不毛の対立に、第3の道を拓くことをめざす。

*

“記号空間論”は、行為の統合構造に関して、どのようにのべているか？ 橋爪【1977c】に暫定的に掲げられてある命題群のうち、行為の統合構造に係わりそうなものをいくつか、再録しておく。

1. 個体は、(人間に) 固有の記号的秩序のなかで、自らを実現する。 <1>
- 4.2 世界を表出する個体の身体的諸活動を、行為という。 <2>
- 4.7 (個体の) 行為は、統合構造を有する。 <3>
- 4.71 行為は、線的特徴をもつ。 <4>
- 4.72 行為は、行為連鎖として、記述される。 <5>
- 6 行為が、(自然的) 世界のなかに定立する、記号的な対象性は、言語的定在である。 <6>
- 6.5 行為の統合構造のなかに織りこまれた言語的定在を、道具という。 <7>
- 6.52 道具によって媒介された行為連鎖を、道具系という。 <8>
- 7 社会システムは、身体の空間的な配置に基礎づけられた、行為の統合/連合構造として、記述される。 <9>

これらの命題は、より具体的、個別的な語々の命題に噛みくだかれ、そのうちに、逐一論証されるのでなくては、ならない。

“記号空間論”の位置づけによれば、行為の統合構造論は、いわゆる言語的定在の理論や、作業系の理論へと、接続していくのであるが、ここでは、そのような文脈を切りはなして、糾然たる行為の統合構造だけに、当面の議論を集中させよう。具体的には、それは、上の命題<3>～<5>をまづもって掘りさげる作業を、意味する。

* *

行為の統合構造を仮設することが妥当であると主張できるためには、どんなことが言えなければならぬか？ 行為に統合構造が存

在するとすれば、それは、行為に内在的なひとつの秩序として実現されることにならねば、行為に対して、固有の適格性(well-formedness)の条件を与えることにならねばなるまい。といえ、行為連鎖の正統な仕えに関して、何かしら適格/不適格(well-formed/ill-formed)の対立が見出されるとすれば、行為に統合構造が存在することの証拠となるのではないかと考えてみることもいい。

ゆえに、以下で、技術、失行症、精神障害、の3つを例にとりあげることによって、行為の統合構造仮説を根拠づけることを、試みたいと思う。

石器の形態学は、行為の統合構造が展開する様相を示す

あらゆる人間行為は、この形態論的相においてみるならば、すべて、記号行為である³⁾、といえようが、ことに、労働⁴⁾過程の形態論的な抽象を、技術とよんでおくのが、適当かもしれない。

注3) これは、“記号空間論”における、行為論の基本テーゼである。

注4) 労働の定義については、橋爪【1977c】の[18]を参照。

さて、『記号空間論(素構)』のテーゼ(前頁<3>)は、技術と、労働過程を支配するひとつの統合的な秩序として、見出すべきことを、含意している。そこで、他の諸技術にまじって、最も古くから人類にあらわれた技術であるところの、石器製作を、とりあげてみよう。

* 石器製作をとりあげるのは、化石人類の発揮した技術のうち、今日、考古学・史前人類学の研究において、その内容が実証的に明らかになっているものが、他にないから、という、まったく便宜上の理由による。植物、皮革、その他を素材とする加工品は、図柄かたもなく消滅してしまっているから。

* 石器の類型学(typology)や、人類の編年(chronology)には、いくつもの学派や流派があるのだから、ゆえゆえにとつては、相対的な前後関係が保たれている限りでは、その実年代の深淺は、関心の圏外にある。そこで、

その任意のひとつを紹介すれば足りる。

フランスの人類学者 Leroi-Gourin は、その注目すべき著作のなかで、アウストラロピテクス（猿人）、原人、旧人、新人たちのうみだした旧石器文化を、大きく4つの段階に整理している。以下、Leroi-Gourin 【1964/1965=1973】にしたがって、要約する。

〈表1〉

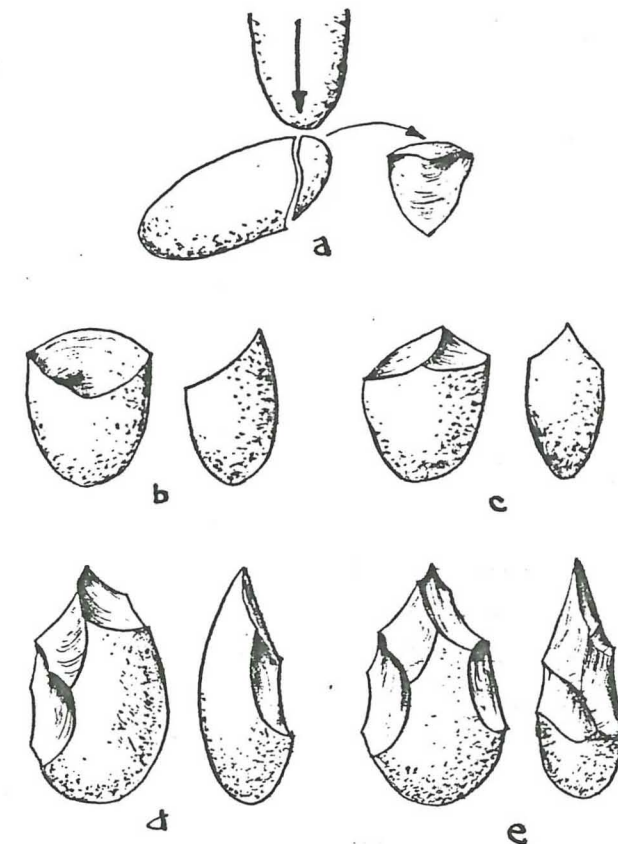
第1段階	垂直の打撃 石核石器	フォッロー クラクニアン型 剥片
第2段階	垂直の打撃 接線方向の打撃 石核石器	フォッロー (ラクロール) 両面石器 クラクニアン型 剥片 アレイド・フレー ト斧
第3段階	垂直の打撃 接線方向の打撃 加工した石核 剥片石器	フォッロー ラクロール 両面石器 ハッチ クラクニアン型 剥片 小斧 アレイド・フレー ほか ルグダロワマン型 剥片 ルグダロワマン型 ポイント
第4段階	垂直の打撃 接線方向の打撃 加工した石核 剥片石器 石刃石器	アレイド・フレー ハッチ 石刃と薄刃 クラクトール バックト・アレイド (斧刃) セラン、 ハッチ・アレイド 鋸 (ポンツール) 月桂樹葉ポイント 有脊ポイント 幾何学形石器 各種骨格器

Leroi-Gourin 【1964/1965=1973】表66 旧石器時代における道具の多様化を示す表。

ガンチャントロプスをはじめとする、アウストラロピテクス⁵⁾の礫石器文化 (pebble culture) から、新人（現生人類）による細石器 (microlith) 文化に至る（数）百万年間に、旧石器文化は、驚くべきことに、実に、単一の技術としての石器製作の、継続的な発展段階として、把握することができるといえる。その最も古い段階をみてみよう（〈図2〉）。この段階は、ただ1回の打撃によって、ひとつの刃をもった石核石器をつくりだす、という、二回以上単純にはなりそうもない労働形態にまで遡りうる。

注5) Leroi-Gourin は、人類の祖型と猿類との区別を強調して、これを、アウストラロピテクスの名称でよび、

〈図2〉



Leroi-Gourin 【1964/1965=1973】図46 第1段階の文化。動作の鎖は左記の順序（a）に限られ、道具に打撃面を付け加えたり、ポイント（c～d）をつくることにより、2, フォッロー（b）から、簡単な両面石器をつくる。

* 歴史考古学は、歴史人類の化石 およびその製作物を、主要な研究素材として扱い、先史人類の生活文化の全体像を再構成することをめざす。そこで当然、この学問は、人間が製作した人工物を、それ以外の自然物からどのように区別するのかという、方法論的に重大な問題につきあたることになる（実は、これは、人間と他の（あるいは人間以前の）動物からどう区別するか、という問題でもある）。殊に、人類の草創期にさかのぼる場合、この問題はぜひとも解決されねばならない。実際、前世紀末あたりには、第三紀層下部の燄石片のなかから、鋭く尖って石器らしいものを学者が選別し、「燄石器」とあると称して陳列したこともあったらしい。（しかし、今日では、石器と天然の石片とは、明確な方法論によって区別されている。たとえどのように単純であっても、「偶然の衝撃」などでは到底説明できない定形的なものと区別されるのが、石器である。どれほど年代を遡っても、見出されるのは、このような石器か、ただの石ころか、どちらかなのだ。

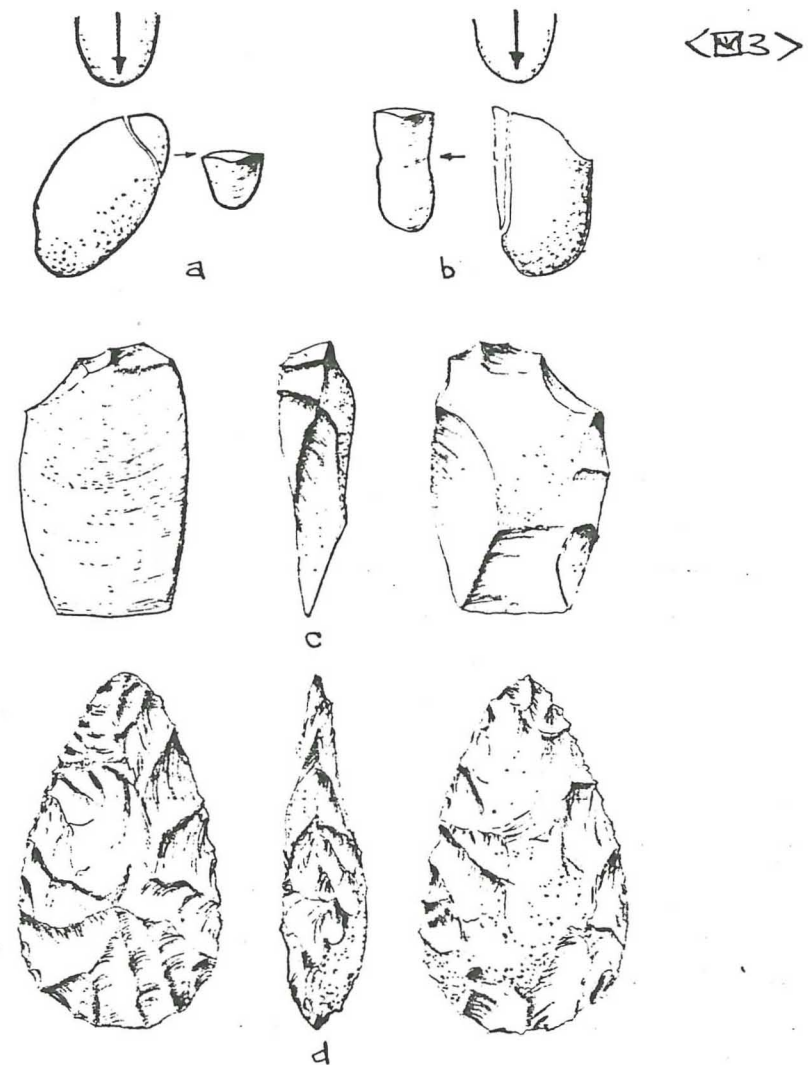
この点は、もう少し詳しく考えるに値するだろう。最も単純な石器と想定するのは、その石片は、どこからみても、偶然のもたらした石片と区別できないかもしれない。たとえば学者の手に入った石片1個の形状は、物理的な法則によつて説明できるからである。（しかし、その石片が石器であると考えるをえないのは、他に同様の形状とした多くの剥片が一緒に発見されるからであり、この一群の剥片から、確率統計的に言つて、きわめて特異な分布は、打撃を一定の角度・方向に生じさせるような、ある「意図」の存在を想定しなければ、説明できないから、である。ある石片が文化に属するとは、その石片が天然の石片とそれ自体において区別されるからではなくて、その石片が、人間的な行為の帰結であるから、ある意図を実現するおる変形操作を施されたものであるから、だ（何らかの人工物を、自然的な諸対象と同じように、操作的にとらえようとする仕方は、しばしば失敗するだろう）。

そのつぎの段階においては、これに、第2の打撃が加わってくる。ほぼ30~40万年にわたってつづいた、前期旧石器時代とよばれるこの期間、この型の石器を採集したのは、原人たち⁶⁾であったが、こ

の段階では、獲得される石器の最終的な形態が、ますます斬与の石塊からかけはなれていく。

注6) ヒトカントロプス(猿), マウエー原人(ヨーロッパ), マンチロプス(中国), アトランロプス(北アフリカ), アフリカントロプス(東アフリカ) などの総称。

中期旧石器時代とよばれる第3の段階では、さらにもうひとつの加撃の仕方がつけ加えられる（図4）。ネアンデルタール人と総称される旧人の石器は、製作過程が複合の度合をつよめた結果、最終生産品は、直接石核からではなくて、剥片からえられるように

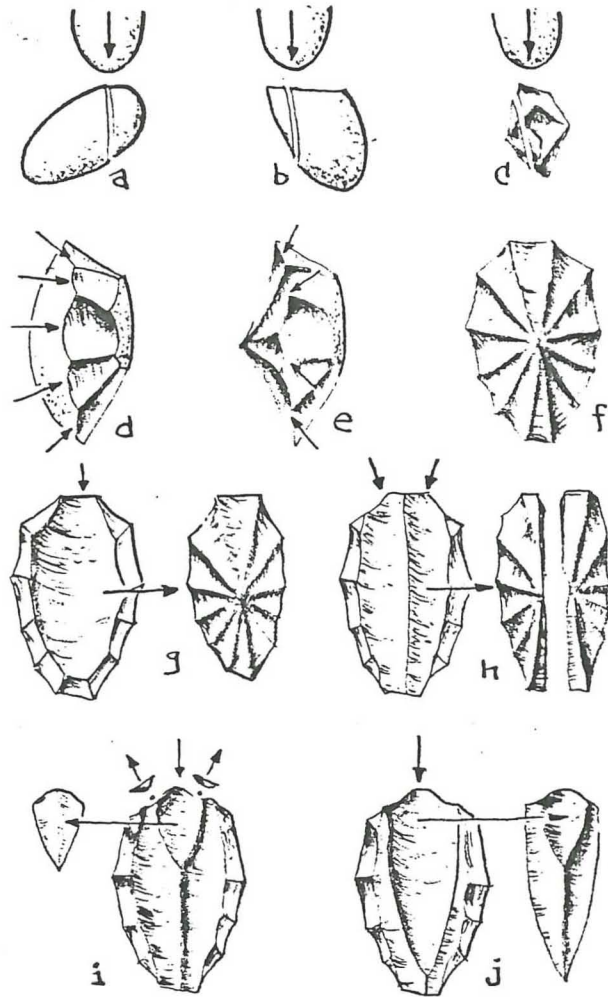


Levallois [1964/1965=1973] 図47 第2段階の文化。第1の連鎖(a)は第1の打撃の型(b)により豊かになる。そのまゝ使う剥片(b)の他、握斧(c)両面石器(d)がある。

た。製作過程の全体は、多種多様な剥片石器を獲得するための、緻密に組み立てられたシステムをもち。

<図4>

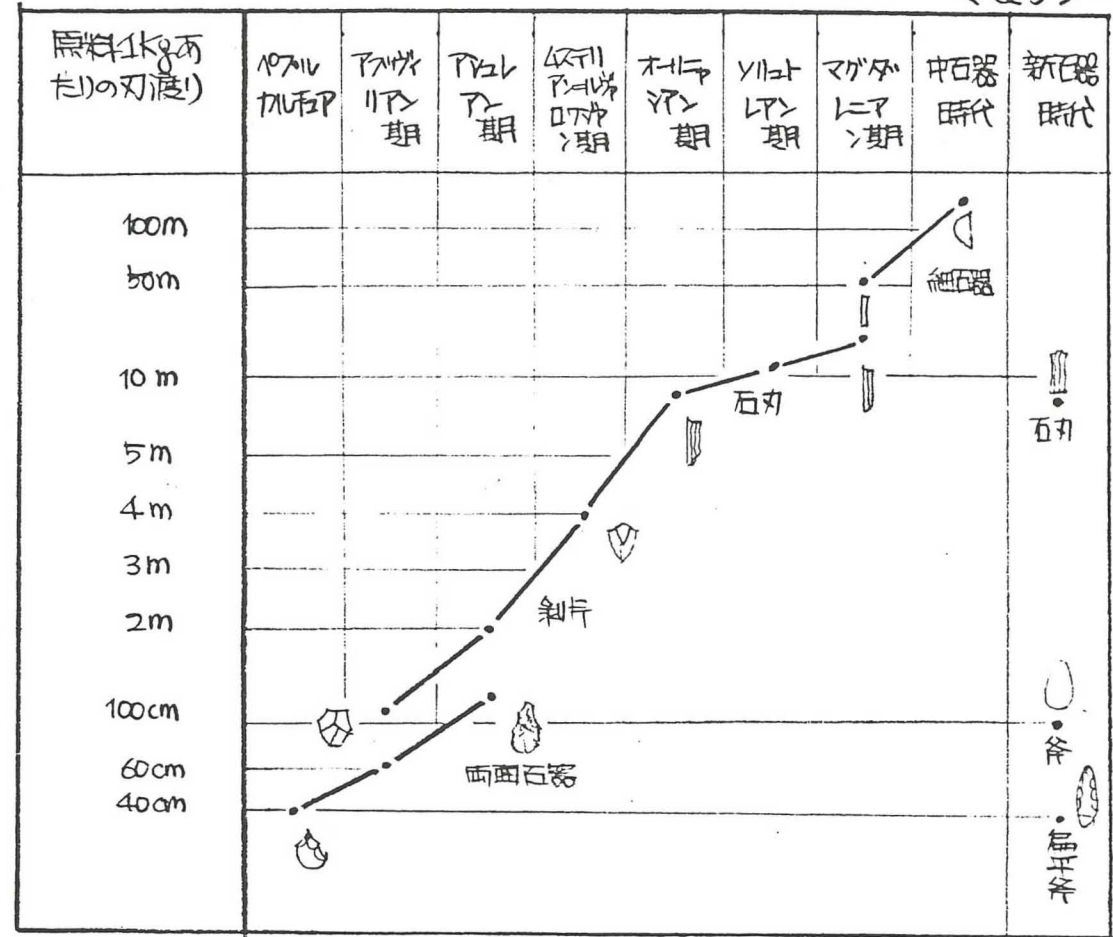
Leroi-Gourin【1964/1965=1973】図48 第3段階の文化。最初の2連の身振り(aとb)が調整された剥片(c)となる。第1(a)と第2連を加えると、たいへん不均質な面質石器、石核(f)ができる。そこからルムロワマン型剥片(g)や一連のアレド・フレウ(h)が切りだされる。アレド・フレウの調整はルムロワマン型尖頭器(ポイント)の切りだしに必要な稜を与える(iとj)。



このような複合には、いわゆる新人(クロマニヨン人)に担われるようになるや、急速にその度合を上げ、後期旧石器時代の石刃、中石器時代の細石器文化へとつながっていく。技術進歩を、たとえば、効率の点からみることができるとすれば、次頁に示すような図表をあらわすことに、11みがあるだろう(表5)。

考古学的な証拠からみれば、人間の象徴活動がきわめて活発になってくるのは、後期旧石器時代に入ってからであるらしい。埋葬のような、何らかの宗教的感情の存在を推測させるような遺跡は、

<表5>



Leroi-Gourin【1964/1965=1973】表64 旧石器時代のさまざまな時期における1kg当たりから得られた有効刃渡りの図表。

これに先立つネアンデルタール人の最も後期の段階から、すでに知られるようになるが、これはあくまでも部分的な現象であり、今日われわれが知るような人間的諸能力の全面的な展開は、数万年前ごろに生じたといわれる「象徴革命」にまたねばならないようである。技術のいちがまし進展と、表象能力の展開とは、密接に結びついている、というべきかもしれない。

石器文化の展開は、技術に関し、113113のことを考えさせてくれる。

私は、以前、行為の統合構造の存在を推測してみた（→橋爪【1977a】）あとで、類似のアイデアを捜してみたのだが、それに類する見解を示しているのは、今まで知りえた範囲では、Leroi-Gourin 位のようなだ⁷⁾。彼はいう、

「……技術というのは、一連の動作に安定と柔軟さとを同時に与える文字通りの統辞法^{辞法}によって、連鎖的に組織された身ぶり^{身ぶり}と道具のことである。動作の統辞法^{統辞法}というのは、記憶によって提示され、脳と物質環境のあいだで生みだされたものである。言語活動との比較を推し進めてみても、それと同じ手続きがつねに存在している。それゆえ、複雑さの度合いや概念の豊かさの点で、技術の場合と類似している言語活動についての仮説を、^{ヤル・カレ・ア}石器文化からアムュレアン期にいたる技術の知識にもとづいて立てることができる。……」（Leroi-Gourin 【1964/1965=1973:122】）

この言説の後半は前半にきくとしても、Leroi-Gourin が、技術の本体を、動作の「統辞法」（および、道具（＝言語的定在））の存在に求めているのは、明らかであって、このことは、わいわいの見地からして、全く正当である。

注7) 本当はもう一人誰か、行為の文法について発言していたように思うが、忘れてしまった。

・石器製作の技術は、いかなる統合構造を有している、と言えるか？ 単一の打撃からなる、最も単純な工程しかもたない技術でさえも、充分複雑な動作の組合せからなる、と考えねばなるまい。まず、石塊に適切な打撃を与えるためには、石塊を固定しておいて、別の石を打ちおろさなければならぬ。このことは、右手と左手の、充分にすすんだ機能的非対称性を、必要とするだろう。また、同様の石器が広範囲、長期間にわたって発見されているのだから、この動作は、充分に反復され、習練をつんだ（自動化的すすんだ）もので

あり、（かも、個体間に継受・伝承される性質のものであったはずである。さらに、加工に先立っては、^{選別}選別して運んでくる（選別にしに出かけていく）という作業が必要であり、また、加工のすすんだあとでは、必要ならば木片などに装束した上、石器を所持携行し、適切な仕方とそれを使用する一連の過程がつづくはずである。

道具の製作過程は、そのもっとも単純な場合でも、このような行為連鎖のなかに現存する。石器の加工に係る行為の統合構造をとりだすとすれば、このような行為（ないし、動作）の連鎖⁸⁾のなかにあつて、眼前の状況から相対的に独立した部分、（かも、いまは眼前せみやがて眼前する石器（ないし、それを使用する場面）の表象——ある種の抽象性、いうなれば、目的——と結びついて、組み立てられている部分、ということになるだろう。

注8) 「動作」「行為」という用語法については、後述する（→35頁）。

* 技術は、身体活動を統制する特定の仕方（記号的秩序）であると同時に、自然的秩序とも一切違背することがあつてはならない。技術は、いわば、この両秩序の接合面に、自らをくりひろげていくのである。技術の統制する変形は、いかに、身体と外果ととともに構成する自然的な諸秩序によって、支離に支配されているには違いない。しかし、技術と、他の自然過程から区別しているのは、その過程が、ある抽象性ないし意図を実現するように、適切に配列された、分節された身体活動の統合構造として記述できるところにある。

技術に典型的にみられるように、行為の統合構造は、さしあたり、①身体肢節の動作の分化、②特定動作の組合わせの固定化、③状況への（相対的な）無依存性、によって、特徴づけられているようにみえる。

いまひとつ、石器文化の展開から、考えておくほうがいい点がある——石器の製作工程が複合化するのに要した、何十万年という、途方もない年月を、どのように理解すべきか？

石器加工の工程が複合化することをおしとどめた障壁要因を想定するといえ、それが、少なくとも、物理的な障壁要因では、ありえ

ないことは、たしかだ。石器加工は、要するに石と石とを打ちあわせる動作だけからできており、ただその組みあわせが、ちょっと複雑になる、ていだけなのだから(図2～図4)。とはいえ、技術を構成する行為の統合構造の展開が、おしとどめられ、きゅめて徐々にしか展開しなかった原因は、つぎのように考えられよう——ひとつには、身体肢節の分化をささえる生理学的変化が生かすのに、時間を要した。もうひとつの可能性としては、行為の統合構造を複合的に構成する(具体的には、図4のように、さまざまな工程を一連の動作のなかで処理していく)にたるだけの心的機制(≒能力)自身が、徐々にしか高度化していかなかった——。Leroi-Gourinによれば、この両者(手と頭脳)は、密接に結びついて、表裏をなす現象なのだという。彼はまた、行為の統合構造の高度化を障礙しているこの同じ要因が、言語の統合構造の複合化をも障礙したと考え、その障礙要因を、結局のところ、頭蓋部の形状に帰着させている⁹⁾。

注9) 旧人も頭蓋の容量(脳の重量)という点では、現生人類に劣らない。そこで、

Leroi-Gourinは「愛蔵革命」の根拠を「前頭部の門」が外れる(頭蓋の力学的均衡が新人に至って最終的に変化した)結果、中頭部の大脳皮質が展開したことに、捜しあてているのである。

“記号空間論”は、いちおう、現生人類の心的語能力を前提としているので、史前人類に関する思弁をめぐらす直接の必要はないが、技術の多様な展開が、完全な象徴能力の獲得されたとおぼしい時期からはじま、という点は、無視できないだろうと思われる。能力の発達するある時点まで、技術(行為の統合構造の特定のありかた)が高度化しえなかった、という事実のもつ意味を、よく反省してみるならば、現にわれわれが知るような社会は、行為の統合構造を高度化させているような能力を前提に成立していること、すなわち、われわれの社会の行為秩序は、ある種の象徴能力(もしくは記号能力)の程度によらなければ、そもそも成り立たないような水準にあること、が推論されるはずである。

失行症は、行為の固有秩序を、逆照射する¹⁰⁾

失行症(apraxia, Apraxie)が注目すべきであるのは、それが、人間にだけ生じることのできる障壁、そう、行為その自体に係る障壁にほかならない、という理由による。生理機能にも、また運動機能にも、一切異状がみとめられないのにもかかわらず、ある特定の仕方で行動することだけが困難(不可能)になってしまうのが、失行症の特徴であるが、ときどき、このような症像が現存するという事実そのものが、人間の行為が直接の有機体的な機制を超えてある水準の秩序に根拠づけられていることを明らかに示す証拠をなくして、何であるのか?

失行症は、1900年、ドイツの医師 Hugo Liepmann によって、はじめに記載された。彼は、単なる精神障害者とみなされていた1患者が、その右腕では、口頭で指示された通りの行動をおこなうことがまったくできないのに対して、右腕を緊縛してしまった場合に、左腕単独では、正常に反応することに、気づいたのである。この患者の元来症状は、言語理解—言語認識の障壁に因るとしても、ま

注10) この項を草するにあたって、参照した文献は、秋元【1935→1976】だけであるから、最近の知見には全く言及すべくもない。しかし、ここであえてそれで満足するのは、ひとつには、この書に、失行症の種々の古典的な症例が詳しく紹介されていて、その病像記述に相当の信頼性がある(と思われる)こと、いまひとつには、この書が、門外漢にまでよいと判るほどの、緻密で洞察にみちた論理構成をそなえた名著であること、によるのである。この書からだけでも、失行症の本質的な諸点は、充分おさえることができなければならない、と思う。

この項でのべる以上に、失行症について論及するのは、その後の知見や学説の展開を、充分に吸収したあとにしたい、と思っている。

た、事物理解—事物認識の障礙によるとしても、説明することができない。

《失行とは、脳疾患の患者にみられる特異な行為解体现象のことである。失行学の創始者リーマンの定義によれば、その自身運動の可能な身体肢節を「一定の目的に従って」動かすことの障礙であり、（かきこの目的行為の障礙が対象の認識障礙（失認）にもとづかない場合を意味する。あるいは失行は運動麻痺および失認より区別されるところの本来の行為障礙である。》（秋元【1935→1976:1】）

失行は、中枢系障礙の一種であって、脳出血、頭部鉄創などによる大脳の一定部位の損傷に基因する、特異な一群の行為解体现象の総称であるのだ。

神経学の基本命題によれば、大脳の一定部位の病巣は、それに対応する一定の神経機能を脱落せしめる（あるいは、むしろ、一定の症状群（ないし機能障礙）が、死後剖検によって発見された特定中枢部位に局在する病巣と結びつけて、解釈される、というべきか？）。それゆえ、神経学の実証化手続きは、観察可能な病像と、観察可能な諸病巣との相関関係を整理して、大脳（神経中枢）を、特定諸機能をゆかりもつ各中枢部位からなる全体として、再構成することにある、と言ってよいだろう。神経学は、このように、本質的に分析的な方法をもつものである。

* 神経学はそれゆえ、局在論対全体論といふ理論的立場の両極分岐への傾向を孕んでいることになるらしい。あるいは、神経学の手法は、一方で、人間の行動を個別諸機能に完全に分割し、それを大脳の各局所に配当する、というふうに徹底することによって、容易に機械論的な機能局在論へと重し、他方で、その反指定として、個別化しえない全体的な機能の存在をみとめる場合には、容易に全体論へと達するであろうから。（以下、秋元も強調しているように、病巣が局在（している）事実と、機能が局在するといふ仮設命題とを、厳格に区別するように、注意しなければならない）

神経学がもつているこのような方法は、つぎのような理由によって、最大限の関心に値する、といえるだろう——ゆいゆいが日常何事なく行っているさまざまな行為は、そのごく単純なものといえども、実は、さまざまな複雑な諸機制のこみいった複合の上に成り立っており、当該の行為に失行する個体の発症史や、当該社会が歴史的に到達した文化水準によって、厳密に規定されているはずである。それにもかかわらず、人間の行為の主要な部分は、あたかも空気の如く自明の秩序に支配されているかのように、「自然に」経過する。このような行為が、本質的に言って、いかなる秩序に支配されたいかなる過程であるかを、明晰に把握することは、①それが意識化されない、②複雑である、という2重の理由にもとづいて、きわめて困難である、と言わなければならないだろう。ゆえとも、そのまま記述しようとしても、無理である。ところが、失行症（あるいはめとある一連の中枢障礙）の病態を説明する神経学は、このような、人間の日常行為の渾一した像を、適切な仕方で切開いている。なぜといって、それは、特定中枢の機能障礙にもとづく失語・失行・失認として、更には、より細かな種々の要素障礙として、人間の行為秩序の全貌を、より基本的な諸機制へと、あたかも断層写真を提示するかのよう、切りやけてみせてくれるから、にほかならない。

秋元【1935→1976】は、賢明にも、その時代における主要な2潮流であった局在論からも、全体論からも、然るべき距離をとりながら、失行症に関する知見を、すぐれた理論的洞察をもって、再構成しているように思われる。その行論全体を紹介することは、とても適りぬので、彼の結論だけを、掲げておく（表6）。

* まづ、個々の疾患が独立なものとしてたゞらいる証拠からみていくことは、よう。〈表6〉にいうⅠとⅡとは、反射の有無によって区別される。あるいは、中枢性神経麻痺の場合には、中枢を介さない反射は残存していることになるが、末梢神経麻痺の場合には、反射すらも残存していない。また一方、ⅡとⅢとは、障害される行為の種類

I. 末梢性運動麻痺



II. 中枢性運動麻痺



III. 運動失行 (狭義の失行)



IV. 失行=失認 (或は失認=失行)

1. 構成失行および構成失書
2. 自己身体部位定位障害
3. 左右障害
4. 手指障害等



V. 失認



VI. 末梢性ならびに中枢性感覚障害

<表6>

(秋元【1935→1976:269】)

別にある2, 太い差異がある。中枢性神経麻痺の場合には、当該の身体肢節を(随意的に)動かさることが、全く不可能であるのに対して、後者、あるいは、運動失行の場合には、肢節の運動性はそこなゆいておらず、ただそれを日常的な行為の場合にどうであるような仕方を用いることが不可能になっているのである。

失行に対するに、失認 (agnosia, Agnosie) とは、純粋な認識の障害をいう。末梢性ならびに中枢性の感覚障害 (VI) が、それらの部位に相当する神経機能の損傷にもとづくのに対して、失認 (V) の場合には、それらが健全であるにもかかわらず、特定の対象をそれとみとめることができなくなってしまう。それゆえ、失認は、認識に係る、より高次の中枢の障害にもとづく、と考えられる。

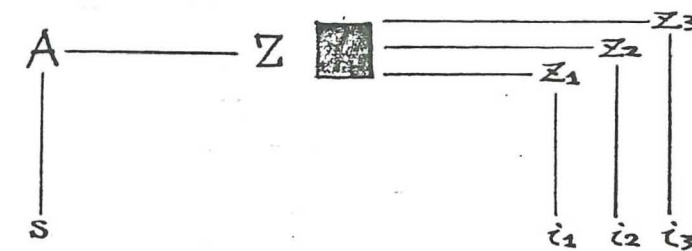
秋元の分類 (仮説) のうち、もっとも理解のむずかしいものが、失行=失認であろう。秋元は、二の病像を、いわゆる失行症 (運動失行) と、失認症 (単性失認) との中間に、位置させている。秋元はいう、

《私は、失行=失認を、失認的要素を濃厚に含有するところの行為障害を総括する概念として用い、構成失行 (およびこれと類似の構造形式を示す自己身体部位定位障害、左右障害、手指障害、構成失書) を包括させ、運動失行および純然たる失認と対立させた。……》 (秋元【1935→1976:269】)

単なる失認があることのために、結果的に、行為が障害されてしまう、ということもあるだろう。あるいはまた、失行であるために、認識が障害されてしまう結果になることも、あるに違いない。しかし、ここに失行=失認とよばれる障害は、いまあげたような、ある原発的な失行 (失認) と、そこから派生した二次的な失認 (失行) とを一括する類の概念ではなくて、失行 (III) から、失認 (V) からとも区別される、独自の原発的な単一障害の概念なのだ。では、どのように考えることのできる根拠は何か? 秋元【1935→1976】が、失行症の全体像をどのように再構成しているのか、いまそこし追いかけてみよう。

*

失行症状のうちにも、いくつか区別すべき種別のあることは、早い時期から気付かれていた。たとえば、失行症の発見者 Liepmann 自身の、行為過程の図式は、つぎのようなものであるが、この図式から、2種類の失行が区別されることになる。



<図7>

秋元【1935→1976】図3、
行為過程の図式
(リープマン)。

S : 知覚
A : 発起表象
Z : 主目的 (結果) 表象

Z₁ : 部分 (中間) 目的表象
Z₂ : 運動のインネンツァン

* 失行の古典理論とよばれるにふさわしい Liepmann の理論について、秋元の紹介しているところを、要約する。失行の理論は、これに支立って完成されていた、失語症の古典理論をひきうつすようにして、開拓されたものらしい。言語をつかさどる精神過程を、反射過程からのアナロジーのもとにつかもうとする Wernicke 描くところのいわゆる精神反射の図式は、上に示した行為過程の図式と、きわめて似通っている。ただ、Liepmann は、行為が(反射と違って)より小さな要素運動の組み立ての上に成立している、という、行為の構造を想定して、図式のなかに盛りこもうとした。あのおのの要素的な運動は、その運動表象——身体部分の移動・行程の表象——と結びついている。行為は、これらの運動表象が、その(おそらく線形的な)結合の形式——運動形式——のもとにおかれることをもって、秩序づけられている。

このような Liepmann の考え方からは、2種類の失行(運動失行と企図失行)の区別が生じた。運動失行とは、運動表象自体の解体に由来するのに対し、企図失行は、運動形式の解体に由来するものである。運動失行は肢節的なあらゆる動作をするのに対し、企図失行は意識過程にかかわる全身的な障害を帰結する。(たとえば、ピク型とよばれる失行などでは、 $c_1-c_2-c_3$ の順に生起すべき、それ自体は健全な動作が、それ以外の、たとえば $c_1-c_3-c_2$ といった順で生起するため、全体としての行為が阻害されているうわけである。)

Liepmann の行為過程図式は、いくつかの失行症の病像を区別して説明するのに、有用であったが、本質的に言って、機軸論的な説明であるために、(当然のことながら)限界のある見方にしかすぎない。構成失行は、そのことを気づかせてくれる。

構成失行は、Kleist が、第一次大戦中の銃創患者のなかから発見した神経症状を、命名したものである。これに該当する患者は、通常の意味での行為は支障なく行うものの、構成行為の場合にだけは、特別の障害を示すのであった。(構成行為は、組立てる、造型する、描画する、など、何らかの空間形象をつくりだす行為である

が、それが特に視角に依存し、行為過程に先行して空間形象の視覚的な表象を必要とする点で、他の行為と区別される。) 構成行為は、記憶による造型よりも、とくに模写の場合に、はなはだしい錯誤を示す。Kleist は、これを、視覚機能と運動機能との協調の障礙であると考え、これを司る高次中枢の存在を想定した。

しかし、自己の肢体を用いた造型行為の障礙¹¹⁾など、さまざまな構成失行の事例を仔細に検討してみると、Kleist のこのような解釈が果して妥当かどうか、疑問が生じてくる。一方で、空間的な認識が健常であるか否かは、左右定位などの行為として示されるのでもない限り、確かめられない。また認識も、紙面に事物の輪郭を把握することである、というよりは、むしろ、事物が行為と結びつけられて、ある種の仕方では了解づけられることではないのか、と反論さうよう。行為と認識とが互いに別々のなたちきである、という前提から出発すると、構成失行のさまざまな症状は、きわめて理解しづらいものとなる。2) しまう。このような見地から、Grünbaum は、失認のなかに失行の契機を発見して、失行=失認 (Apraktognosie) の概念を創出し、また、Kroll はさらに、失行のなかに失認の契機を探りあてて、失認=失行 (Agnosopraxie) の概念を提出したのである。

注11) 描画した実験者の姿勢を、模倣(ようして)も、失敗してしまうことを、構成失行にかこづけるのは、これが、自己の肢体を用いる構成行為の一種である、ということによる。

秋元は、この両名とは別箇に自家例を考察するなかから、ほぼ同様の結論に達した。(ただし、秋元は、病像を区分する臨床上の要請から、彼のいう失行=失認を、狭義の失行、狭義の失認の中間領域に相当する症状をさすものと考えた点が、少々相異している。) このようにして秋元は、述べた、神経障害に関する彼の結論に達したのである(→23頁)。

* *

失行=失認概念を提出した秋元の所論が、その隅々に至るまで、妥当なものであるかどうかを考えてみようとするれば、秋元説に反対する立場の人々からの批判や、失行研究の最近の諸成果にも、十分に目配りをしてなければ、明確なことは存にも言えないだろう。もちろん、いま必要なのは、そうしたことではない。さしあたり、ゆれゆれは、機械論や全体論に抗して、失行症状を失行=失認として解しようとする秋元説の主旨が、正当なものであると考えることは、できるのであり、そこから掘めるだけのものを掘り出せばよいのである。

失行=失認という概念は、その裏側に、当然、行為=(イコール)認識、という視角を内蔵している。人間の行為と認識とが基本的に不可分であると考えてはじめ、失行現象の本態が理解できる、というのか、その基本的な立場であるのだから。そこで、これを座から見返して、失行症をはじめとする神経障害のさまざまな症状類型を、一貫して適切に説明する、ということを根拠にして、行為=認識という視角にたった行為仮説が一般的に妥当であること（あるいは、健常者の行為を説明しうること）を、主張することも、可能となるかもしれない。

発達した人間の態勢では、いわゆる行為と認識とは、分離を与えて、別の秩序に属するもののようになり分けられる。しかし、失行=失認論は、行為と認識とがもと同じひとつの渾一体から分離を与えて来ったものであることを、指摘する。では、なぜ、そのように考えなければならないのか？ 秋元も例としている、左右障害をとらあげて、考えてみるでしょう。

左右障害とは、「外界の事物および自己の身体において、左右という方向を弁別する能力の乏しなれた状態」(→秋元【1935→1976:107】)をいう。ところで、(少し考えてみるとわかるが)左/右という概念(ないし、事態)は、何らかの身体像の存在を前提としないと、成立たないものである¹²⁾。

注12) 身体像が存在すること自体は、たとえば、切断された手足に関して幻肢(phantom limb)という現象がみられることなどによつて、容易にたしかめられる。

* もう少し、この問題を、先まで考えてみよう。左/右という対立軸は、単独にあるわけではなくて、他の二つの対立軸、前/後、および上/下と相関的にしか、設定されない。これらの対立軸のうち、最も基本的なものは、上/下である——それは、重力方向と一致し、内臓感覚とも結びついているから。また、脊椎動物は、面対称の体躯を有しているが、移動の方向が対称面の方向と一致しており、そこに、前/後の軸が成立する。対称面に関して(これは、上/下、および前/後の2軸によって張られる面と一致する)体躯の両側が、互いに非対称な分化をとげるとき、上/下、前/後に対して、これと直交する第3の軸、左/右が成立するようになる。(左/右は、身体性の分化に結びついているため、文法的な対立、学ばれぬはならない対立である、と言えようか。) 身体像における、空間秩序成立の論理的機序は、このようでありえないはずだ。ついで、身体像において成立した対立軸によつて、外空間が秩序づけられていく。……

身体像は、行為の分化に根拠づけられ、経験から徐々に抽出されたところに、成立する。幼児の場合には、左右の弁別は、意識的な努力を要する作業であるかもしれないが、やがて、そうした努力を要さなくなるまでに自動化し、意識されることもなくなる。身体像の実質は、そのような、受動経路(認識)と能動経路(行為)との安定した結びつきであり、ゆれゆれの「純然たる行為」や「純然たる認識」の後景に退いてはいるが、それを根拠づけるものであるような、心的世界の構成素である。

神経障害は、すでに出来上ったある神経機能を、脱落させる。このような身体像が解体していくとすれば、左右を認識すること、指図すること、左右を弁別すること、が不能になりうるだろう。身体像は、いわば、行為と認識との相互作用-相互形成の、ストックであり、左/右能力は、そのような身体像のなかの、単一機能なのだ。この機能は局在している故に、単独で脱落する——秋元は、失

行=失認としての、左右障の本態を、大体このように考えている
と思われている。

* 秋元は、手指失認もまた失書も、同様の失行=失認論の見地から、解
明を試みている。ことに、失書(Agraphie)の臨床的な分類は、設
得かにも富んでいた議論であると思うが、残念ながら、とても紹介するだ
けの限界がある。

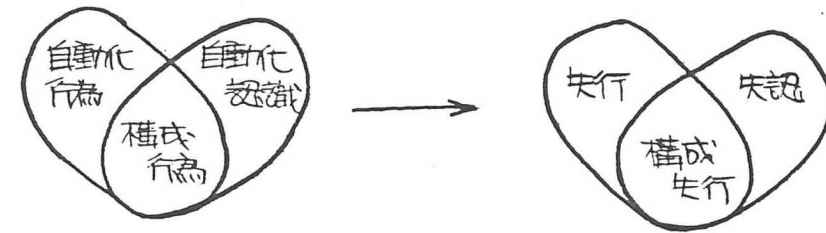
* * *

失行症に関する失行=失認論の主張をおしあかめるほらば、それ
を、つぎのようにまとめることができるかもしれない。

- 0 認識と行為とは、本来、互いに他を包含する。¹³⁾ <10>
- 1 当初、認識と行為とは、分化せず、渾一体としてある。 <11>
- 2 やがて、日常的に反復される行為は、認識の契機を生って、
自動化する。 <12>
- 2.1 行為の自動化は、身体肢節毎におこる。 <13>
- 2.2 行為の自動化の脱落も、身体肢節毎におこる(運動失行)。 <14>
- 3 同じく、日常的に反復される認識は、行為の契機を生って、
自動化する。 <15>
- 3.1 認識の自動化は、脱落(うろ)る(失認)。 <16>
- 4 安定的な自動化の全体から、身体像がうまれる。 <17>
- 5 そのときにも、自動化しないでの二る行為=認識が、構成行
為である。 <18>
- 5.1 構成行為は、身体像を地とする。 <19>
- 5.2 身体像の(部分的)脱落は、構成行為を(部分的に)障
碍する(構成失行)。 <20>

注13) 「認識」とは、いかにもないことであるが、秋元は、神経学の
術語として用いているので、そのまゝ用いておく。

* このからい出ていること、簡単に図示すると、下のおになる。



<図8>

* ゆえに、このようにして、失行研究のなかから、行為=認識の視角
をひきずりだしたわけであるが、実は、これは、失行症をめぐってなすべき
仕事の、ほんの一角にしかすぎない。行為を支配する秩序について、は
っきりしたことを語るためには、少なくとも、失行・失語・失認の関連
を、よくよく考えとみななければならぬだろう。失語について、この項
でほとんどふいふえなかつたのは、材料に全く目を通しておらず、何の準
備もない、という単純な理由による。しかし本格的に議論する機
会をもちたいと思う。

行為は、自由である

人間の行為を支配する秩序がどのようなものであるか、を考える
ことは、人間がいかに自由であ(りう)るか、を考えることに、ほ
ぼ等しい。そして、人間は、無条件に自由である(あるいは、人間
の行為可能性に、あらかじめ、何らかの絶対的な外的制約を付く
ておくことは、根拠があるとはいえないはずだ)。それはなぜか?
“記号空間論”の仮説によれば、行為が自由であるのは、行為の秩
序が、身体性の分節/統合の上に立脚する、行為の統合構造として、
実現されているから、である。

行為の(として、文化の)出発点は、まず、身体のさまざまな
なみえを、固有の仕方で分節することにある。その上で、切りわけ
られた身体性を、身体における認知的に統合し、行為として実現し

ていくところに、表現としての行為の形態論的な特性があらわれる。かくして、行為は、形式的に記述すべきものであり、その限りで、自由の定在なのだ。

石器製作技術の展開、ならびに先行症の例をみたわければ、ひとまず、そこからえた知見を、最大限に拡張して、発見されるはずの行為の統合構造に係る、いくつかの仮説をひきだすことを、試みよう。

*

* 人間は本能に支配される度合いがきわめて小さい、ということが、動物行動学の常識として語られている¹⁴⁾——本能は、一見きわめて複雑で合目的的な行動を、動物が行うことも、可能にさせている。しかし、本能は、(何らかの仕方で)あらかじめ動物のなかに書きこまれた秩序であり、それが状況に依存して開発されるものであって、プログラムの変更可能性がほとんどない。(したがって、本能にもとづく行動は、異なった状況のもとでは、たちまち「不合理な」行動に転化してしまう。これに対して、人間が示す秩序だった行動は、そのどこひとつとして、(厳密な意味での)本能にもとづくものであることが明らかにされたことはない、——と。日常の人間行動のなかで、純自然的な過程として(だけ)記述できるものは、あまりにも少ないだろう。人間にも、最小限度の反射は存しているけれども、人間行動のほとんどは、反射弓(ないしその拡張、たとえば、サイバネティクス)から説明できる範囲をこえた事象である。

注14) 変形生成文法派が提案しているような、人間の言語能力の概念は、生得的な機能ではあるけれども、いわゆる本能の概念とは厳密に区別されていることに、注意しなければならない。本能が、実現している行動の秩序をいわば直接に書きおさるものに対して、人間に与えられた能力(の概念)は、多様な(あるいは無限の)行為の生成能力を、個体に付与するための概念なのであるから。

人間の行為は、どのように内在的に秩序づけられていると考えられ

ばよいのか？

人間は、正しに、自らの身体に対するに特殊な仕方をもってしている。しかし、人は、平常その仕方にあまりに慣れたしんでいるために、通常は、自らの動作がいかん特殊であるか(つまり、可能な動かし方のうち、いかに限られた仕方しか、身体を動かしてはいないか)に、思いいたることが、稀である。そのため、異文化と接触する場合に、自文化のなかでは自明視されるあまり、ほとんどの自然的な模範に支配されると思いこまれてきた身体秩序が、いかに、異文化相互の相対性のなかでは、異様なものと映りうるかを知らず、驚くようなこともおこる。このように、個別文化毎に、深く身体のなかに根をおろしている動作の構成法を、身体技法(technique du corps)とよぶことは、至当であろう。

身体技法は、生理的な身体に付加された、一種の記号的な秩序として、成立する。というのは、それは、適格な仕方とそうでない仕方との対立の上に、築かれているからだ。身体技法は普遍的であり、(しかも、意識的、構成的な努力に及ぶものでもある以上、集(つみ)もまた、あらゆる文化に見出されるのは当然である。集は、その内容が恣意的でありうるのに比し、その含意するところは、あらゆる文化において汎通的であるだろう——集の隠された主題とは、身体を如するに、身体技法をもつてする以外にないことを、不可避の前提として、幼頃の主体性が自らを組み立てるようになること、であるのだ。

* 集は、Freud 派によつては、抑圧と昇華の回路として、構造-機能派においては、社会と規範受容の過程として、考察される。これらのいずれとも異なる見解を、〈言語〉派社会学は提出することになるだろう。

排泄の集は、きわめて早い時期に、通文化的に見出される点で、とりわけ重要であろう。排泄は、生命の必然である以上、まったくの自然過程以外のものから成り立っていない上に、食餌行為に比してさるなか、随意的でない反射に、その遂行のより多くを費している。すなわち、排泄は、一方で内臓のリズム(自然的秩序)と結び

ついている。排泄に関する事は、(むしろ)タイミングの問題であり、然るべきとき、然るべきところで、然るべき様式によって排泄することが、主題として導かれる(というより、無慈悲にも強要される)。これには、衛生上の配慮や他人たちの利害の背後にかくいた、より根の深い、記号論的な根拠がある。内臓諸器官を支配する生理的な律動とい自体が、社会性のなかにおかれることによつて、二義的なものにおとしめられ、むしろ文化的な律動によつて「調律」されるべきものであることを、しらざるをえなくなるのだ。文化は、このような身体性の根源的な分節の上に構成されるほかはない¹³⁾。さまざまな精神障壁にあらわれる人格の崩壊と、排泄の不始末ない(弛緩とか、しばしば並行する事態であるのも、根拠のないことではない。

注13) 排泄物に対する汚穢感(および、それと裏腹の関係にある、愛着)、排泄行為の根源的な反社会性も、ここに発している。

* *

行為が統合構造に秩序づけられて実現していくことが、行為が自由であることの根拠をなしている、というのが、「記号空間論」の考え方である。では、行為の統合構造は、どのようなものであるのか? それは、具体的言語々のタイマの行為を、図式的に仔細に検討してみれば、何ともいえないのだが、その際の作業仮説になりそうな一連の命題を、掲げていこう。

H 身体の自然的な律動を調律することは、身体性の分節/統合の形式に、根拠を与える。 <21>

* この内容については、舞と身体技法に関連させて、いまのあたりで述べてある。身体の自然的なリズムを調律することは、身体動作の分節/統合を秩序づける能力に根拠を与え、構成的な行為の前提をなす。

音楽はひとつの、構成された秩序に属するといえ、音感はその基層

にある、身体性の分節/統合のある固有の仕方であるだろう。各民族が独特の音感を身につけていることは、身体技法の深い層に固有文化が刻みこまれた刻痕とみることができる。刻みこまれるには、その相応の時期があり、それを逸すると、うまくいかないようである。

なお、人間が火を用いる唯一の動物であることも、つけ加えておこう。

* この命題 <21> は、身体にふたつの重要な律動が存在することを前提としている。「記号空間論」が提出する(予定の)仮説では、このふたつの律動が存在することと、音楽の可能根拠をなすものなのだ。もう少し敷衍しよう。音楽にあらわれるようなリズムは、振子の周期性のようなものと考えられるだろうか? たしかに、ドラムを叩くという動作は、いくつかの関節を支点とし骨格筋によつて動かされる円弧的な運動の組みあわせからなっているようにみえる。しかし、打撃の周期性は、疲労が当然にもたらすであろう運動の減衰に抗して、保たれているのであり、そこに、音楽性¹⁴⁾が身体において実現されるひとつの抽象的な形式性として、成立している。

どのような表現も、生理との緊張関係を、その背景として有している。(ここで、生理とは、身体における自然現象を支配する秩序を、いう。)

H 行為が、可塑的であり、自由であるのは、行為が、身体性の分節/統合を主体とする形式性であることに、もとづく。 <22>

身体の運動が、人間の場合には、いったんばらばらな要素に分解されてくまうのであれば、その結果、これらの結びつきには、(物理的な制約により不可能な場合はもちろん除くとして)ありとあらゆる組合せが(原理的に)可能であることになるだろう。特に前肢(手)の場合に最も顕著であるように、人は、個々の身体部位を独立して動かすように、一旦その動きを分解し、そのうちに、それと(意図的に)構成して、全体的な行為へとまとめあげる。行為が自由であるのは、行為が、自然法則的な必然性のない動作のつらなりとして、展開するからである。

* 二つは、「唱う」という行為を考えてみよう。物理-生理的な観点からは、人間の「音」が、何か他の動物の叫喚音よりましであるとか自由であるとかいうことは、決して言えないだろう。(しかし人間の持っている「うた」という経験は、「あと」である以上に、「え」と「ことば」との幸福な統合である。人は、聴覚を司る神経によって、自らの発声を、発音(音素)に統合するよう、分解する、そのことによって、生理的な過程である「い」→「え」が、「え」→「うた」という形式性を与えた音連鎖によって展開しうることになる。このときに、はじめのうたう行為が、旋律をうみだす、ひとつの自由な行為となるのだ。

H 行為のうち、日常反復されるものは、自動化する。 <23>

自動化については、失行症の項で、論じておいた(→29頁)。行為が自動化しうるのは、それが元来、非自動的な、意志的構成作用とともにある動作の連鎖であるからである。それゆえ、失行症の場合、これが脱落したり、短絡反応¹⁶⁾としてだけ残存したり、したのであった。この結果、動作のある連鎖としての行為は、それ自体、ひとつの単位に転化するものであり、一層大きな連鎖を有する統合構造のなかに組み入れられていくことが可能となる。

注15) 意識して、ボタンをはめようとしても、できないのに、何かり拍子でたまにボタンが触れたりするとうまくはめることができてしまったりする類いの反応を、いう。

そして、たぶん、つぎのようなこともまた確かだ。

H 行為は、つぎのような階層性をおびている。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{所作} \\ \text{所作} \\ \text{所作} \\ \vdots \end{array} \right\} \text{— 動作 — (要素) 行為 — 行為連鎖 —}$$

<24>

* まず、行為の最小単位として、個々の身体部位がないうる要素的な所作がある。所作は、(たとえば)右手と左手、拇指と人差指、…と

いふ場合に、互いに同時的な対立をなすことにより、身体全体としての姿態のなる、ひとつの動作を実現することになる。いくつかの動作は、線的に排列されることにより¹⁶⁾ひとつの(要素的な)行為が成立する。行為がさらに組み合わされていくことにより、任意の長さの行為連鎖が生じてくる(行為連鎖とい自体が、行為に再転化することもある)¹⁷⁾。料理、工作、スポーツ、書字、… などの任意の日常具体的な諸活動ととりあげて、上のように分解してみることができる。どこまでが自動化しており、どこからが意識的に構成されているかを、具体的な行為の連鎖に即して考えてみることは、きわめて興味深い。Taylor-マスマン スポーツ科学、ダンス、礼法研究などの分野では、こうした分析が(無意識に)行なわれているはずである。

注16) 動作は、いつか全身を占領するので、いくつかの動作は同一身体の上では、相前後して、所系列の中で(か)生じらる。行為の線的性質はここから生じてくる。

注17) あえていうならば、(要素的な)行為は、語彙(vocabulary)に相当し、行為連鎖は parole に相当する、ということになる。

H 無対象行動の場合に、行為の連鎖は、容易に形式化する。 <25>

* 行為は本質的に言って、過程としてしか存在しない。

行為が過程である、とは行為に、厳密な意味ではじめとかおわりとか中断点とかを見出すことができないことを、いうのは正しい。行為に支那て行為の果実があるのではなく行為は、自らが展開し自らを実現していくただなかにしか、その果実をもっていない、ということを用いている。

* 無対象行動とは較する意味で、対象を必要とする行動。たとえば「ボクシング」を考えてみよう。ボクサーの行為は、独自の内在的な行為秩序によって支配されている、といえるだろうか？ あるいは、統合構造としてとりあげられるだろうか？ ボクサーのリングの上での行為は、相手ボクサーの姿勢によって、状況依存的に決まていくだけではないか？ —— ボクサーの行為は、全然形式的秩序に服していない。というわけではない。ボクサーは、low blow など反則をしないよう定められているし、3分間動かしは1分間休むだろう。

また彼は、試合中にとにかく出かけていたりすることは、できない。要するに、ボクサーは、彼の意志により、規約にもとづいて、ボクシングの試合をしていくのだ。また彼は、試合中、ただ規約に外れないように手を振りまわしているわけではなくて、自分の自動付いた行為のハイパーリー-のなかから、アンダーフット、フェイントムーブ、クリンチワークなどを、適当に組みあわせて動いているわけである。このように記述できないところからはみだした部分——試合の経路に相当する——は、たしかに、あらかじめ判っているわけではない。それは、ボクシングという行為の形式を構成してはいない、と言っておこう¹⁸⁾。

ボクシングという行為は、その自身勝手に与える対象（相手ボクサー）とかわるものであるために、11条の11のように、行為の過程の不確定性に、つきまとめる。これに対して、対象が動かず、もしくはその性質が熟知されている場合、行為は、あらかじめ形式化することもできるような手順に、結晶する（たとえば、料理、道具の使用、技術、……）。殊に、無対象行動（厳密には、自己の身体のみを対象とするような行為、というべきか）の場合には、このような形式化は、もっとも生じやすい。それは、身体の動きと自己が目的化し、表現へと純化するからである（歌、彫刻の類）。

厳格な形式化を与えた無対象行為の最たるものとして、言語行為を考える。

注18) ボクサーにとっては、試合に臨むこと自体が、ひとつの行為であって、その内容が、即時的に（状況適合的に）繰りたされる自分の行為から成り立っていることは、さあたり彼の行為の統合にかかわらない。X月X日に試合をするというだけが大切であって、そのために、数ヶ月前から、ランニングやスパーリングをくりかえす、というように、自分の行為を秩序づけるのである。

11) 行為は、相互に区別されて、一連の種別をなす。 〈26〉

12) 行為は、言表可能である。 〈27〉

〈27〉の命題は、行為と言語との結びつきを考えるために、重要で

ある。行為が言表可能であるとは、単に、行為が対象的にとらえられ、対象像をなす結果、それについて語りうるようになる、という二つをいっていいのではない。行為が、言語を用いる主体によって、内在的に分節/統合された秩序として存していること、と、言い換え、行為秩序と言語秩序とが並行的な事態として成立していること、をいっている。すなわち、行為の言表可能性とは、行為の、言語への、翻訳可能性を含意している。

とすれば、〈27〉を、つぎのように言いかえるべきかもしれない。

11) 行為可能性と、言表可能性とは、合致する。 〈28〉

あるいは、言表可能性と、思考可能性とを、同一視するとすれば、つぎのようになる。

11) 行為可能性と、思考可能性とは、合致する。 〈29〉

この仮説は、思いついた仮説である。というのは、行為の内在的な障礙と、思考の障礙に帰してしまふことになるから。

* この仮説が妥当であるかどうかは、いまはなんともいえない。また、二つを提出している他の諸仮説と矛盾しないかどうかは、はっきりしない。

12) 特定の行為を遂行する間は、その行為に集中する心的把握がはたらく。 〈30〉

人が無数の行為可能性へと開かれているとすれば、特定の行為をおこなうということは、他の行為可能性を排除することによってしか、可能とならない（この機制は、行為の線的性質の課す、必然である）。このような心的作用は、個々の行為が必要とする心的作用の外部にあるはずである。この作用は、ひとつの行為が過程として現前している間、それ以外の行為可能性を非現前へとおしやっ211るのであり、この現前/非現前の対立のなかで、行為の現在が確保されることになる。

H 心的把握が働いている限りで、そのもとにある行為は、非現前化した他の行為と、抽象的な関係をもつことができる。 <31>

石槌に根気よく打撃を加えていることができるならば、その行為は、そこに現前してはいない別の種類の行為と、抽象的な仕方では、結びついているはずだ——そうやってういた剣片を用いて、肉を切りさそう、という具合に。この抽象的な関係を、目的とよんでも、かまわないだろう。このようなときには、まだ現前してはいない行為が、現在の行為を生じさせているのである。

H 心的把握は、階層的であ(りう)る。 <32>

このことによつて、現在は、多様な非現前と結びついている。

また、行為に関して、目的という概念をたてることができるのならば、目的連鎖という概念も成立するだろう¹⁹⁾。すると、一連の行為は、目的連鎖を介して、互いに支配/非支配の関係におかれることになる。

注9) 行為連鎖が、現実の行為の視覚的な生起をいつたのに対して、目的連鎖は、現前(ない行為)の非現実的な系列のことを、いっている。

H 階層的な心的把握の全体が、心的自己把握を構成する。 <33>

心的自己把握とは、行為の主体性の根拠をなすものだ、といえる。心的自己把握は、任意の行為を自己の近傍とするから、であり。このことによつて、現在にありながら、考えられる限りの将来にまたがっている。

* (しかし、行為は、本質的に過程的であるから、目的連鎖にもとづいて行為を統合する仕方は、きつめて不安定なものでしかない。行為が、他の行為へとむかひないで、むしろ、自ら、行為の自足性へとむかう場合には、行為は、ひとつの完結した表現となるか! 遊戯となるのであり。そのようなときには、心的自己把握が消失していく。

行為の統合構造の浸乱としての、精神病像

さいごに、いわゆる精神病が、わいれわれに何を開示してくれているのかを、考えてみよう。

* 精神(分裂)病について、肝腎なことは、なに一つ判っていないというのが、それを専門に説明する立場のほとんどの精神医学の現状であるらしい。たとえば、それは、いかなる場合いかなる条件のもとで発症し、または発症しないのか? いかなる場合に寛解がみられるのか? 精神分裂病は、単一の疾患なのか、それとも、いくつかの症候群に分離されるものなのか? いかなる機制にもとづいて、向精神薬は、精神症状に作用を及ぼすのか? そして、一番中心的な疑問であるのだが、精神(分裂)病の本態は、いかなるものであるのか? —これらは、いままも全く不明のままに、のこされている。

ここで、精神障害ととりあげるのが、医学的な見地からでないことは、勿論である。以下では、病因が何であるかを全く保留したまま、その病像について、考察を集中させる。

* 精神障害について社会的な考察を加えること、しかも、単にその思惑的な事情を社会的に整理したりすることと異なるのではなく、その病像の中核を、社会事象として掘り出す限りを掘りまくこと——これが必要であると考え、精神障害については、かねてから関心をよせつづけてきた。しかし、この分野には、手をつけたばかりなので、前節と同じような形で、今後の作業仮説となりそうな命題群を、提出してみることにしよう。精神病像がわいれわれに教えてくれているのは、それが行為の障(一種の、行為秩序の破格)としてあらわれている、ということであるが、それとともに、そのような破格ないし異常さが、関係のなかで、了解にとって、あらわれてくるということである。これを反省して、つぎのように言ってみる。

H 行為は、了解可能である。 <34>

ある行為を了解する、とは、その行為が生成されたと同じ深さだけの統合構造を溯ることだ、と考えておこう。だから、この命題は、

〈27〉にいう言表可能性(≡記述可能性)とは、異なることをいっている。ここにいう了解可能性は、原理的に了解できない行為は存在しないはずだ、という主張であって、現に、ある行為が、その当事者や他の第三者にそれと「了解」されるかどうかについて、言っているわけではない。

* 精神障害に対するもっとも普通の日常語は、「気がいい」であるが、これは、その事象が、他者の心的領域において生じた異変(ないし病変)であると解されていることを示す。そこで、出発点として、次のように問うてみよう——人は、他者の心的世界を直接うかがい知ることができないのに、なぜ、そのような判断(ないしラベリング)を下しうるのであるのか？

治療の専門家のなかには、併知とか Praeco-Gefühl とか言って、面接場面で相手が発裂病者であることぐらいいは、(訓練と経験をめば)直覺としてわかる(ようになるものだ)と考える人々もいる。人が発裂病者とよばれる人々と対するとき、(生理に近いような水準での反応として)何か「異様な感じ」を覚えることがある、ということはいくつかの経験的事実であると言ってもいいだろう。しかし、「気がいい」のレベル以上に大きくものをいっていることは、疑いがない。しかし、専門家が、限られた面接時間のあいだに自分たちがそのようなラベリングを「的確に」行いうるよう修練をうける(ことが出来る)という事実を絶対化して、「発裂病者は発裂病者らしいと分泌している」と考えようとするのは、それは問題だ。専門家は、「患者」の常同行動の有無や、視線、応答、「異状」などを、あばやく察知して、既知の症例類型と照らしあわせて、発裂病の病像と重ねあわせる、という早業をやっていることもできる。しかし「患者」の周囲の人々は、そういうことをするわけではない。

行為の了解可能性と結びつけて、つぎの仮説をたてるべきかもしれない。

「行為は、有意味である。」

〈35〉

「行為の抽象的な構造が、行為の意味である。」

〈36〉

行為が何の意味もないものであるはおはなく、何の意味をもつものもある、ということとは、自体的には、あらゆる社会のあらゆる人々にあらかじめ熟知されている、と言っている。社会理論にとっておかしなのは、そのような意味を、どのように掘り上げるか、である。

行為が意味あるものであるのは、それが、心的世界を有えた個体の表現としてあるからだ、と考えるならば、行為は、何らかの外にある意味と結びつくのではなくて、行為それ自身において意味を果現する、と考えなければならぬ。〈36〉の命題は、行為の統合構造が、行為の意味と全く対応するだろうことを、仮定している。

* 日常、社会的な相互交渉のなかで、人々は、他者の心的過程の存在を自明の前提とし、その内容を忖度しながら、生を営んでいる。そのようなことが、何ゆえ可能であるかと言えば、それは、ひとつには、他者の知られる限りの(観察可能な)行為の外形から、他者の意図や動機や感情の一切、総じて、心的領域の具体的な在り様を推し測っているからであり、いまひとつには、他者の言表の内容を、他者の心的世界の直接、間接の表明というわけとめ、意味理解しているから、にほかならない。

もちろん、二のような忖度がつねにうまくいくと限るわけでもないし、また、完璧に他者の心的世界を移して、完了してしまう、ということもありえない。しかし、それにせよ、(通常は)他者の心的過程を了解することは可能なはずだ、という基本的な信頼感が、社会生活の前提になっている。(現にある他人について何ひとつ理解していないとしても、それは、相手をよく知らないからだ、と現実的制約から説明される。)

心的世界は、行為を支配する秩序、とりわけ、その統合的な秩序のなかに、表出される。とすれば、ざっくり、つぎのように言ってもいいだろう——

「心的世界の昏迷ないし潰乱は、行為の秩序、とりわけその統合

的な秩序を、乱さなければいけぬ。

<37>

これは、「記号空間論」からする、心的障礙論の基本命題である。

* 表情にせよ挙動にせよ、それが、ある瞬間において、それとして「異状」を
みとめられたりすることは、ないと考えべきだ。今解写員が目明らかに
するように、表情という過程的な動きは、全体的な脈絡のなかで適切な
表出として受けとられるのであって、個々の瞬間には、いかようにも「病的
的」な表情でありうる。

同様に、ごく小さな行為でも、それとして切りはなされることはない。人
は、行為に支立つ他の行為を
知り、脈絡を知ることによって、ようやくその行為の意味を理解してい
く。そして、他者のある行為の連鎖が、どのようにしても、彼の心的世
界を理解するに至るだけの統合構造をなしている、と感ずる
とき、はじめ、「異常」感におちいれるのに気付くはずである。

*

いままで知られているどのような社会でも、「気がいい」に相当
ある心的異常の策略を有している。そして、二種の破格は、ちよ
うどわけわけの社会の法概念においても「違法性」と「有責性」と
が互いに区別されているように、社会規範に対する違反（≡犯罪）
からは根本的に区別された基準に樹てられている（はあである）²⁰⁾。
これを一般化して、次のように言ってもいいだろう。

行為の適格性/破格性の条件（文法性 grammaticality）に
は、ふたつの基準がある。ひとつは、浅い層（行為の外部、も
しくは行為と行為の間）にあり、社会規範に対する逸脱/非逸
脱に相当する。もうひとつは、深い層（行為の内部）にあり、
行為の統合構造の成立/解体に相当する。

<38>

注20) もちろん、こういふからといって、「未開」のある段階で、今日わけわけ

のこのような、個体の心的異常とい自体が、共同体の課する社会規範
に対する違反である犯罪と、等置されてしまったり、連続的に区別が、さ
りしなかったりする場合もありうることを、念にしているわけでは無い。

社会は、行為の適格性に関する、二重の規準（double standard）
を有している。確信犯の場合に典型的なように、浅い層の破格は、
超意的に規定されたにすぎない社会規範に違反しただけだから、そ
の行為はそれ自身充分に了解が可能であると考えられる。このよう
な破格とされる行為は、表出としてそれが必然であるときには、生
あるであろう。それに対して、心神喪失直の場合には、たとえ浅い
層の破格を犯しても、それがすでに深い層で破格に至っている結果
だとみなされ、「犯罪」としては扱われない。

社会に、行為の適格性に関する double standard があることは、
行為の統合構造の存在を主張する根拠のひとつになる。

* 因みに言うと、高橋康世は、知的な破格であるノンセンスにも、浅い型
（チャロル型）、深い型（アルター型）のふたつがある、と指摘している。

* *

まだ、論じたいと思つていて論じていることが、ふたつあ
る。ひとつは、心的世界の異変が、いかにして、行為の統合構造の
潰れと結びつくのか、ということ、もうひとつは、心的世界の異変
が、いかなる行為の統合構造の潰れと結びつくのか、ということであ
る。

はじめの問いについていえば、すでに提出した仮説群から、①身
体性の分節/統合、②身体像、③構成能力、④心的自己把持、⑤思
考過程、が破された場合に、行為の統合構造が潰れさるだろう。
という推測がつく。このうち、①は、最後までなくなることはない
ようであり、③は、全体的な知力の低下と結びつくしかない。②の
場合には、失行様の症状があらわれるはずであり、実際、精神症状
のあるものは、失行・失認・失語などの神経症状と似通つているよ
うである。

うだが、病像の全景を蔽うとはとても言えない。のこる④と⑤は、一応有望に思われる。④は、〈30〉～〈33〉をみてもわかる通り、「現在性」と「自己性」が顕著なところから、鍵である。⑤は、〈28〉、〈29〉にもとづくものだというよう。

第2の点について言えば、精神障害は、失行症などよりも、はるかにサイズの大きな行為連鎖を秩序づける統合構造に、乱れを与える、と予想される。

しかし、いかにせよ、材料も準備も不十分なので、いまは、これ以上言いうることはない。

行為の統合構造仮説は、どう発展するか

* この節では、「記号空間論」のなかで、行為の統合構造概念が他の諸概念とどのように結びついているか。ことに、言語的決定論、道具系の理論、作業系の理論、記号能力仮説、との関連を略述するつもりである。だが、詳細と準備の部分で省略する。いかに、遠からず論じる折があることと思う。簡単には、【1977C】を参照したい。

REFERENCES

- 秋元 波留夫 1935 『失行症』金原商店；1976 東京大学出版会。
- Chomsky, Noam 1959 Review of B.F. Skinner, Verbal Behavior, Language 35:26-58.
- 橋爪大三郎 1976 「20世紀理論言語学の展開」(未発表)。
- 1977a 「記号空間論(構想)～言語派社会学原理～」(未発表)。
- 1977b 「作業系の社会理論のために」『ソシオロギス』1:92-94。
- 1977c 「記号空間論(素描)」(未発表)。
- Leroi-Gourin, A. 1964/1965 Le geste et la parole, 2 vols., Editions Albin Michel, 荒木 亨訳, 『身ぶりと言葉』1973, 新装版。
- 野口昌也 1977 「『精神疾患』と規範」『現代思想』5-9:88-95。
- Skinner, B. F. 1974 About Behaviorism, Alfred A. Knopf, Inc. 大田 花訳 『行動工学とは何か』1974 佐学社。
- 高橋 康也 1977 『ハセンス大全』, 晶文社。
- 田上隆司・河合洋祐 1977 『牛語』(私家版)。
- 澤井由美子 1976 「リアリティとアイデンティティ～コミュニケーションの視角から～」(未発表)。
- 巨 田 志 1976 「コミュニケーション能力とあるいは多元的現象」(未発表)(要約『ソシオロギス』1:50-62.1977)。
- Wlodarczyk, A. 1977 Essai de la sémiologie préhistorique. Pour une théorie des signes classiques. 林みどり訳。『史前時代の記号学試論——人類最初の描記符号の理論のために』『エステター』3-7:212-245。
- 山本 泰 1977 「〈共存性〉様式としてのコミュニケーション」『思想』635:29-51。